

きょうだいとの死別体験が遺されたきょうだいと家族機能に及ぼす影響の探索

関西学院大学人間福祉研究科博士課程後期課程 赤田ちづる

関西学院大学人間福祉学部 坂口幸弘

要旨

本研究では、犯罪被害としての事故によるきょうだいの死が、親子関係に与えた影響をきょうだいと親の視点から探索することを目的とした。突然の事故によって子(きょうだい)を亡くした家族10組を対象とし、遺されたきょうだいの親子関係における苦悩に関する16項目、遺されたきょうだいのグリーフに関する24項目を測定した。

遺されたきょうだいの多くは、きょうだいとの死別による親子関係の変化を辛く感じる傾向にあった。また、遺されたきょうだいと親の認識には乖離があることも示された。子どもを突然に亡くした家族は、親が親としての役割を果たせなくなることがあることが考えられる。突然の死における混乱期において、家族の中でお互いが助け合うことができない状況にあることが伺える。本研究は探索研究に過ぎないが、親子ペアデータの分析ができたことの意義は大きいといえる。今後はさらなる研究知見の積み重ねが必要である。

研究報告書

1. 緒言

近年、グリーフケアという言葉が広がりを見せ、大切な人を亡くした子どものケアも注目され始めているが、その多くは親を亡くした子どもが対象となっており、きょうだいを亡くしたきょうだいの抱えるグリーフに触れている研究や文献は非常に少ない¹⁾。犯罪被害者白書によれば、平成 30 年度には年間 5183 名の尊い命が交通事故を含む犯罪被害で奪われており、その周りには多くのきょうだいが存在することは容易に想像できる²⁾。喪失体験は、どのような状況であれ、心理的衝撃や苦痛を伴うものであるが、とりわけ、犯罪等の被害のような事件・事故を原因とする外傷体験を伴う喪失体験は重篤な悲嘆反応をもたらすことが知られている³⁾。それにも関わらず、犯罪被害によってきょうだいを亡くした遺されたきょうだいに関してはほとんど注目されることはなく、2016 年になってようやく、第 3 次犯罪被害者等基本計画において遺されたきょうだいへの支援が基本方針に加えられた。これにより、遺されたきょうだいの存在が露わになり、支援の必要性が提言され始めているが、現状では支援の輪が広がっているとは言い難い。支援の方策を考えるにあたっては、まず犯罪被害によるきょうだいとの死別体験の実態を明らかにすることが必要であるといえる。家族は死別後関わることのできる貴重な存在、家族が家族の悲しみをどう認めることができるのか、グリーフのプロセスは「家族」に大きな影響を受ける⁴⁾。そこで、本研究においては、犯罪被害としての事故によるきょうだいの死が、家族機能、特に親子関係に与えた影響を、今回は親子それぞれの心的葛藤に触れず、きょうだいと親の視点から探索することを目的とする。

2. 方法

1) 研究方法

郵送による質問紙調査

2) 対象・時期

犯罪被害による突然の事故によって子（きょうだい）を亡くした家族 10 組。対象となる家族は、エリクソンの発達段階説を参考に、育った家族の影響を大きく受ける乳児期から成年期初期(0 才から約 30 才まで)にきょうだいとの死別体験を持ち、尚且つ、調査時において遺されたきょうだいが 18 歳以上の家族を対象とした。

3) 内容

筆者らの前研究⁵⁾を参考に、遺されたきょうだいの親子関係における苦悩に関する 16 項目(5 件法)、遺されたきょうだいのグリーフに関する 24 項目(4 件法)を独自に作成した。

3. 結果

1) 対象者の属性

対象となったのは10組の家族、親10名、きょうだい10名の計20名であった。親の性別は男性1名(10%)、女性9名(90%)、平均年齢は57.2±7.45歳であった。きょうだいの性別は男性2名(20%)、女性8名(80%)、平均年齢は25.8±6.73歳であった。死別の原因に関しては全ての家族が「事故」と回答した。10家族において、亡ききょうだいは11名、性別は男性3名(27%)、女性8名(73%)、平均年齢は12.9±9.13歳であった。死別からの経過期間の平均は14年8か月±5年8か月であった(表1)。

表1. 対象者の属性

		現在の年齢	死別からの期間	亡ききょうだい(子) の年齢と性別		死別の原因	故人からみた続柄
1	親	58	24年6ヶ月	1(男)		事故	母親
	子	26					
2	親	52	12年1ヶ月	16(女)		事故	母親
	子	25					
3	親	64	18年3ヶ月	19(女)		事故	母親
	子	40					
4	親	51	19年11ヶ月	1(女), 3(女)		事故	母親
	子	19					
5	親	65	14年6ヶ月	18(女)		事故	母親
	子	26					
6	親	47	4年5ヶ月	24(女)		事故	母親
	子	25					
7	親	49	15年5ヶ月	4(男)		事故	母親
	子	21					
8	親	61	14年2ヶ月	14(女)		事故	母親
	子	24					
9	親	69	17年6ヶ月	15(男)		事故	母親
	子	22					
10	親	56	7年6ヶ月	26(女)		事故	父親
	子	35					

2) 遺されたきょうだいの親子関係における苦悩に関する認識

遺されたきょうだいの親子関係における苦悩に関する16項目について、きょうだい・親それぞれに回答を求めた。遺されたきょうだいには、「きょうだいとの死別後、次の変化をあなたはつらく感じましたか」と教示し、親には、「きょうだいとの死別後、次の変化を遺されたきょうだいは辛く感じていたと思いますか」と教示した。

遺されたきょうだいにおいては、9割が「悲しみにくれる両親の姿を見ること」を辛かったと回答し、「親の世話をすることが増えたこと」「(亡き)きょうだいの代わりに何かをすることを周りに求められること」「自分が生きている意味が見えなくなったこと」と続いた。(表2)。

表2 遺されたきょうだいの親子関係における苦悩に関する本人と親の回答分布

	きょうだい(n=10)			親(n=10)		
	辛かった	辛くなかった	経験していない	辛く感じていたと思う	辛く感じていなかったと思う	経験していないと思う
悲しみにくれる両親の姿を見ること	9(90%)	1(10%)	0(0%)	8(80%)	2(20%)	0(0%)
親の世話をすることが増えたこと	6(60%)	2(20%)	2(20%)	2(20%)	1(10%)	7(70%)
きょうだいの代わりに何かをすることをまわりに求められること	5(50%)	5(50%)	0(0%)	10(100%)	0(0%)	0(0%)
自分が生きている意味が見えなくなったこと	5(50%)	4(40%)	1(10%)	8(80%)	1(10%)	1(10%)
親が、きょうだいの代わりを求めていると感じること	5(50%)	4(40%)	1(10%)	5(50%)	2(20%)	3(30%)
きょうだいだけが親にとって特別な存在になったこと	5(50%)	4(40%)	1(10%)	5(50%)	3(30%)	2(20%)
きょうだいの代わりをしたいと思うこと	5(50%)	3(30%)	2(20%)	6(60%)	2(20%)	2(20%)
親が親としての役割を果たすことができなくなったこと	4(40%)	5(50%)	1(10%)	6(60%)	0(0%)	4(40%)
きょうだいの話を親とできなくなったこと	3(30%)	6(60%)	1(10%)	4(40%)	1(10%)	5(50%)
家庭内でのあなたの仕事が増えたこと	3(30%)	5(50%)	2(20%)	4(40%)	2(20%)	4(40%)
親が自分に注意を払ってくれなくなったこと	3(30%)	4(40%)	3(30%)	5(50%)	2(20%)	3(30%)
葬儀の準備を親ではなく自分がしたこと	2(20%)	2(20%)	6(60%)	0(0%)	0(0%)	10(100%)
他のきょうだいとの関係性が変わったこと	1(10%)	5(50%)	4(40%)	2(20%)	2(20%)	6(60%)
亡くなった経緯や経過を、親に聞くことができなかったこと	1(10%)	3(30%)	6(60%)	1(10%)	1(10%)	8(80%)
両親の関係性の悪化を感じたこと	1(10%)	7(70%)	2(20%)	4(40%)	1(10%)	5(50%)
親が、亡くなった理由を説明してくれなかったこと	0(0%)	3(30%)	7(70%)	0(0%)	2(20%)	8(80%)

3) 遺されたきょうだいの親子関係における苦悩に対する認識の不一致

遺されたきょうだいの親子関係における苦悩に関する16項目において、本人と親の認識の不一致を検討した。「親の世話をすること増えたことが辛い」と回答したきょうだい6名のうち、4名(67%)の親が「辛く感じていなかったと思う・経験がない」と答えた。また、「家庭内での仕事が増えたことが辛い」と回答したきょうだい3名のうち、2名(67%)の親が「辛く感じていなかったと思う・経験がない」と答え、「(亡き)きょうだいだけが親にとって特別な存在になったことが辛い」と回答した5名のうち、3名(60%)の親が「辛く感じていなかったと思う・経験がない」と答えた。「葬儀の準備を親ではなく自分がしたことが辛い」と回答した2名のきょうだいの親が2名(100%)とも「辛く感じていなかったと思う・経験がない」と回答した(表3)。

表3 遺されたきょうだいの親子関係における苦悩に対する親の認識

	親	
	辛いと感じていたと思う	辛くないと感じていたと思う・経験がない
悲しみにくれる両親の姿を見ること(n=9)	8(89%)	1(11%)
親の世話をすることが増えたこと(n=6)	2(33%)	4(67%)
きょうだいの代わりに何かをすることをまわりに求められること(n=5)	5(100%)	0(0%)
自分が生きている意味が見えなくなったこと(n=5)	5(100%)	0(0%)
親が、きょうだいの代わりを求めていると感じること(n=5)	3(60%)	2(40%)
きょうだいだけが親にとって特別な存在になったこと(n=5)	2(40%)	3(60%)
きょうだいの代わりをしたいと思うこと(n=5)	4(80%)	1(20%)
親が親としての役割を果たすことができなくなったこと(n=4)	3(75%)	1(25%)
きょうだいの話を親とできなくなったこと(n=3)	2(67%)	1(33%)
家庭内でのあなたの仕事が増えたこと(n=3)	1(33%)	2(67%)
親が自分に注意を払ってくれなくなったこと(n=3)	2(67%)	1(33%)
葬儀の準備を親ではなく自分がしたこと(n=2)	0(0%)	2(100%)
他のきょうだいとの関係性が変わったこと(n=1)	0(0%)	1(100%)
亡くなった経緯や経過を、親に聞くことができなかったこと(n=1)	0(0%)	1(100%)
両親の関係性の悪化を感じたこと(n=1)	1(100%)	0(0%)

4) 遺されたきょうだいのグリーフ体験

遺されたきょうだいのグリーフ(悲嘆)に関する 24 項目について、きょうだい・親それぞれに回答を求めた。遺されたきょうだいには、「きょうだいとの死別後、あなたはどのような感情を感じていましたか」と教示し、親には、「きょうだいとの死別後、遺されたきょうだいはどのような感情を感じていたと思いますか」と教示した。

遺されたきょうだいにおいては、9 割が「両親をこれ以上傷つけてはいけないと感じた」と回答し、「きょうだいより自分が死んだほうがよかった」「自分の居場所がどこにもないと感じた」と続いた(表 4)。

表4 遺されたきょうだいのグリーフに関する本人と親の回答分布

	きょうだい(n=10)		親(n=10)	
	感じていた	感じていなかった	感じていたと思う	感じていなかったと思う
両親をこれ以上傷つけてはいけないと感じた	9(90%)	1(10%)	4(40%)	6(60%)
きょうだいより自分が死んだほうがよかったと思った	8(80%)	2(20%)	7(70%)	3(30%)
自分の居場所がどこにもないと感じた	8(80%)	2(20%)	4(40%)	6(60%)
きょうだいの代わりに自分が死ねばよかったと感じた	7(70%)	3(30%)	7(70%)	3(30%)
自分が我慢すればいいと思ってしまう	7(70%)	3(30%)	7(70%)	3(30%)
自分だけが生きていることを申し訳ないと感じた	7(70%)	3(30%)	7(70%)	3(30%)
自分の感情を我慢してきた	7(70%)	3(30%)	9(90%)	1(10%)
自分の悲しみはだれにも伝わらない	7(70%)	3(30%)	7(70%)	3(30%)
自分も死んでしまいたいと考えた	7(70%)	3(30%)	7(70%)	3(30%)
亡くなった原因は自分にあると感じた	7(70%)	3(30%)	1(10%)	9(90%)
本来の自分自身ではなく、「いい子」「明るい子」を演じてきた	7(70%)	3(30%)	5(50%)	5(50%)
両親に心配をかけないように過ごした	7(70%)	3(30%)	5(50%)	5(50%)
一人になったようで淋しかった	6(60%)	4(40%)	9(90%)	1(10%)
家に自分の居場所がないと感じた	6(60%)	4(40%)	4(40%)	6(60%)
学校に自分の居場所がないと感じた	6(60%)	4(40%)	6(60%)	4(40%)
自分に対する怒りの感情を持った	6(60%)	4(40%)	4(40%)	6(60%)
周囲の人に怒りの感情を持った	6(60%)	4(40%)	7(70%)	3(30%)
他の人に話すことができなないと考えた	6(60%)	4(40%)	7(70%)	3(30%)
助けてあげることができなかつたと感じた	5(50%)	5(50%)	7(70%)	3(30%)
親に気にかけてもらえなくなつたと感じた	5(50%)	5(50%)	4(40%)	6(60%)
誰も自分を助けてくれなかつたと感じた	4(40%)	6(60%)	7(70%)	3(30%)
亡くなったのは自分の責任だと感じた	4(40%)	6(60%)	1(10%)	9(90%)
何も信じることができなかつたと感じた	3(30%)	7(70%)	7(70%)	3(30%)
亡ききょうだいに対して怒りの感情を持った	1(10%)	9(90%)	2(20%)	8(80%)

5) 遺されたきょうだいのグリーフ体験に対する認識の不一致

遺されたきょうだいのグリーフ(悲嘆)に関する 24 項目において、本人と親との認識の不一致を検討した。遺されたきょうだいの 9 割が感じていた「両親をこれ以上傷つけてはいけないと感じた」に対して、「感じていたと思う」と回答した親は 4 名(44%)、「感じていなかったと思う」と回答した親は 5 名(55%)であった。また、「亡くなった原因は自分にあると感じた」と回答したきょうだい 7 名のうち、6 名(86%)の親が「感じていなかった」と回答し、「亡くなったのは自分の責任と感じた」と回答したきょうだい 4 名のうち、3 名の親が「感じていなかった」と回答した(表 5)。

表5 遺されたきょうだいのグリーフに対する親の認識

	親	
	感じていた と思う	感じていなかった と思う
両親をこれ以上傷つけてはいけなと感じた(n=9)	4(44%)	5(56%)
きょうだいより自分が死んだほうがよかったと思った(n=8)	7(87%)	1(13%)
自分の居場所がどこにもないと感じた(n=8)	3(37%)	5(63%)
きょうだいの代わりに自分が死ねばよかったと感じた(n=7)	6(86%)	1(14%)
自分が我慢すればいいと思ってしまう(n=7)	5(71%)	2(29%)
自分だけが生きていることを申し訳ないと感じた(n=7)	5(71%)	2(29%)
自分の感情を我慢してきた(n=7)	6(86%)	1(14%)
自分の悲しみはだれにも伝わらない(n=7)	5(71%)	2(29%)
自分も死んでしまいたいと考えた(n=7)	6(86%)	1(14%)
亡くなった原因は自分にあると感じた(n=7)	1(14%)	6(86%)
本来の自分自身ではなく、「いい子」「明るい子」を演じてきた(n=7)	3(43%)	4(57%)
両親に心配をかけないように過ごした(n=7)	4(57%)	3(43%)
一人になったようで淋しかった(n=6)	6(100%)	0(0%)
家に自分の居場所がないと感じた(n=6)	3(50%)	3(50%)
学校に自分の居場所がないと感じた(n=6)	4(67%)	2(33%)
自分に対する怒りの感情を持った(n=6)	3(50%)	3(50%)
周囲の人に怒りの感情を持った(n=6)	5(83%)	1(17%)
他の人に話すことができないと考えた(n=6)	5(83%)	1(17%)
助けてあげることができなかつたと感じた(n=5)	4(80%)	1(20%)
親に気にかけてもらえなくなつたと感じた(n=5)	2(40%)	3(60%)
誰も自分を助けてくれないと感じた(n=4)	3(75%)	1(25%)
亡くなったのは自分の責任だと感じた(n=4)	1(25%)	3(75%)
何も信じることができないと感じた(n=3)	3(100%)	0(0%)
亡ききょうだいに対して怒りの感情を持った(n=1)	1(100%)	0(0%)

4. 考察

遺されたきょうだいの多くは、きょうだいとの死別による親子関係の変化を辛く感じる傾向にあった。遺されたきょうだいのほとんどが「悲しみにくれる両親の姿をみること」が最も辛かったことだと回答したことからも推察できるように、親の悲しみが遺されたきょうだいの悲しみに大きな影響を与えていることが懸念される。また、6割のきょうだい「親の世話をすることが増えたこと」を辛く感じていた。悲しみにくれる両親の世話を遺されたきょうだいが担ってきたことも示され、子どもを突然に亡くした家族は、親が親としての役割を果たせなくなることがあることが考えられる。

また、遺されたきょうだいと親の認識には乖離があることも示された。今回の調査では「親の世話」が何を指すのか明確に示していなかったため、親子で「世話」に対する認識の差があったことも懸念される。しかしながら、家族の変化の中で少しでも頑張ろうとする遺されたきょうだいの姿を、両親は気がついていなかったといえるであろう。また、「葬儀の準備を親ではなく自分がしたことが辛い」と回答した2名のきょうだいの親が2名とも「辛く感じていなかったと思う・経験がない」と回答している。突然の死における混乱期におい

て、家族の中でお互いが助け合うことができない状況にあることが伺える。

遺されたきょうだいのグリーフ(悲嘆)に関しても、親子関係に関わる感情と自責の念が目立った。9割のきょうだい、「両親をこれ以上傷つけてはいけなかった」と回答したことからも推察できるように、悲しみにくれる両親の姿を見続けることで、両親をこれ以上傷つけてはいけなかった、きょうだいより自分が死んだほうがよかった、などのグリーフ(悲嘆)を抱えることがあることが示唆された。また、グリーフに関しても、遺されたきょうだいと親の認識には乖離があることが示された。「両親をこれ以上傷つけてはいけなかった」と遺されたきょうだいの親の半数以上が遺されたきょうだいのような感情を持っているとは思ってもいないことが示され、「亡くなった原因は自分にあると感じた」と自責を抱えたきょうだいの8割以上の親が、遺されたきょうだい亡くなった原因が自分にあると感じていないことが示された。今回の対象者の全員が事故での死別のため、原因がきょうだいにあることは考えにくい、それでも遺されたきょうだいは自分を責め、両親をこれ以上傷つけることのないように、親に相談することなく一人で抱える傾向にあることが伺える。

5. 結語

家族における子どもの死は、それまでの家族システムに深刻な混乱を起し、家族の変化をもたらす。今回の調査では遺されたきょうだいの親子関係における苦悩と、遺されたきょうだいのグリーフ(悲嘆)について探索し、親子間には認識の差異があることが示唆された。本研究は探索研究に過ぎないが、親子ペアデータの分析ができたことの意義は大きいといえる。今後はさらなる研究知見の積み重ねが必要である。

6. 参考文献

- 1) 赤田ちづる・坂口幸弘(2020)「犯罪被害によるきょうだいとの死別体験に関する研究の動向」心的トラウマ研究 15;47-55
- 2) 警察庁 犯罪被害者白書 <https://www.npa.go.jp/hanzaihigai/whitepaper/w-2018/html/zenbun/index.html> (2019年10月28日)
- 3) Worden, j. W. (1991) Grief counseling and grief therapy. (成澤實訳) Springer Publishing Company, Inc. New York.
- 4) Kathleen, R.G., & Rebecca, J.G., (2017) Siblings Grief and Its Effect on the Family System. In Brenda, J.M., & Howard, R. (Eds.), Sibling Loss Across The Lifespan, Routledge.
- 5) 赤田ちづる・坂口幸弘(2019)「犯罪被害による子どもの死が児童期・青年期のきょうだいに及ぼす影響の探索」死の臨床 42(1);201-207